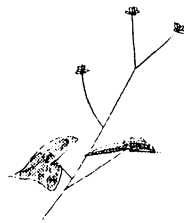


加藤辨三郎 述

歎異抄

17

文責 本誌編集部



専修念佛のともから

釈迦牟尼佛と阿弥陀如来の二尊の智慧と慈悲によつて、念佛をちようだいし、歎びを感じている人は、自然に二尊のご恩を感じるのは必然です。私なら私の例をとれば、私は釈尊に対して、おかげさまで佛教に遇わせていただいておりますがとうございますと、しみじみ思います。さらには佛教を直接教えてくださった金子大榮先生のご恩を思わないではいられません。ですから、ご恩報じといった大それた

ことではありませんが、金子大榮先生に教わったことを、皆さま方にもお伝えして、せめて亡き師匠さまのご恩に報いたいという気が離れません。そこでいつも、金子大榮先生がそうおっしゃいました、あるいはそうお書きになつたとご紹介もうしあげているのです。しかし、そのような心が起るのも、よくよく考えてみると、みな如来からのたまものであります。歎びの心が起ることも、報恩の心が起ることも、如来の御力によると、私は信じさせてもらっています。

そこで金子大榮先生のお説を伝えるのですが、「専修念佛のともがら」なればこそ、わが弟子、ひとの弟子ということが、より起こりやすいのではないかと、先生は反省していられました。確かに専修念佛のともがらは、おれがおれがとはいいません。また、おれについてこいとはいっていません。だが、わが方に来い、わが方尊しと、それがいつの間にか師匠気取りになってしまふ。これはむしろ聖道門といわれるご宗旨、たとえば禪宗の方には、それはないのではありませんか。あるいは、少ないのではないかと、こうおっしゃっていられます。私はこのお言葉に非常に啓発されました。そういわれれば、禪宗の方では、御師匠が、深く反省されています。すぐれた弟子があらわれると、喜んで、もうわしはお前に説くものは何もない、どこそこ、だれそれさんがいられるから、あそこへ行って法を聞きなさいといっています。

秀れた弟子を、立派な御師匠に預けて修行させるといふ禪宗のやりかたは、わが弟子、ひとの弟子といっているのとは反対です。禪宗というと、自力だとはかり思いがちですが、こと弟子との関係になると、むしろ禪宗の方が謙虚で、非常に反省が深いと思います。専修念佛のともがらの方は、

凡夫で、欲も深く、いかりそねみなどがあつても、そのまま救われるというので、ついいい気になって、むしろ反省がないのです。このことをおっしゃられた金子大榮先生は、ご自身の反省であるとともに、専修念佛のともがらに対するご警告であつたと思います。

『華嚴経』に、善財童子が五十三人の御師匠を歴訪し、その御師匠がそこで何を説かれたかが、きわめて簡潔に書かれています。ある師匠のところへ行くと、よう来た、よう来た、しかしわしはただこれだけしか知らない、これ以上の上のことは、どこそこに、こういう方がいられるから、そこへ行きなさい、そこでよく教えていただきなさいと、いずれの御師匠たちも非常に謙虚です。そして、次から次へと回され、五十二人目は文殊菩薩で、文殊菩薩は、文殊の智慧しか知らないといわれ、わし以上なのは普賢菩薩だから、普賢菩薩のもとに行きなさいと教えます。五十三人目の普賢菩薩は、信じて念佛する、自分はこれしか知りませんと、真宗と同じようなことをいっています。『華嚴経』では、信心こそが根本で、功德の母だと説いています。だから親鸞聖人も『華嚴経』を読まれ、「信は道のもと、功德の母なり」と『教行信証』に引いていられます。これは信心一

つという非常にありがたい教えです。

人縁・法縁

そして、金子大榮先生は、人縁・法縁ということ深く教えてくださいました。ここで味わうべき点は、「つくべき縁あればともなひ、はなるべき縁あればはなる」とっています。これは人縁なのです。たとえば、親鸞聖人ご在世中にも、鹿島門徒とか、横曾根門徒とか、高田門徒とか、もうグループができてきているのです。それがそれぞれ一種の派閥みたいになっていくわけです。それはみな人についているのです。性信房とか、真佛房とかいうふうには、だれそれのご縁で自然に、その方のところへ集まってきたのです。ちようど私が、たまたまの御縁で、金子大榮先生に御縁を得ましたように。

もとはまったく偶然です。私は本屋へ行って本を探していたら、『佛教概論』が見つかって、これは佛教のことがみんな書いてあるのだらうと思ひ、さっそく買って帰りました。その著者が金子大榮先生でした。これがもとで、一にも金子先生、二にも金子先生、こう結ばれてきたわけです。私は幸い金子大榮先生にお教えをいただき、終生変わ

ることがありませんでした。この人縁は、条件によつていろいろ変わることは、十分にあり得るのです。たとえば、転勤があると、この転勤がまた一つの縁で、おのずから疎遠になることもあるのです。いわゆる夫婦の縁なんかでも、このごろは四組のうち一組が離縁するという話ですが、これが人縁です。縁があつてもなつて夫婦になる。いつの間にか鼻について飽きてしまうのか、別れ話が出てくる。芸能人なんかとかくあります。あれは離れるべき縁がおのずから生じるのです。だれが悪いとか彼が悪いのではなく、縁は無量、重々無尽の縁です。だから、われわれがどうすることもできません。人縁はそのように変わるのです。

ところが、私たちが本願を信じ念佛もうすということ、最初はこの人縁から入つてまいります。そのありがたい人縁をいただいて、今度は法に触れていきます。すると見えず知らずの人、あるいは初めて会つた人でも、本願を信じ念佛もうす人であれば、もう十年の知己のように親しくなつて、胸襟を開いて語ることができます。ともどもに親鸞聖人の教えを仰ぐのです。その源に還えれば、釈尊の佛法を信じ、ひとえに念佛を称えているのは法縁なのです。これは人縁が縁となつて、法縁になります。今度は人縁と違つ

て、法縁の方は変わらないのです。よしんばブラジルに転勤になるとか、移住したということになると、ついごぶさたになるのでしょうか。けれども、ともに念佛を称えていることについては少しも変わりません。

法縁はもう変わることがありません。変わるのは人縁です。このの章に「つくべき縁あれば云々」「はなるべき縁あれば云々」は、みなことごとく人縁です。法縁は永遠である、変わることがありませんが、もし変わるとしたら、こちらが法との間で、豹変するので、人縁を離れているのです。「わしは真宗よりもキリスト教の方がよくわかる、だから真宗の方をおさらばしてキリスト教へ行く」、こういう人もあります。反対にクリスチャンであった人が、「いや真宗はすばらしい」といって、クリスチャンをやめて、真宗になる人もあります。これは法縁です。しかし法の方が捨てているではありません。法は常に輝きわたっています。だが、こっち側が法に背いて他の方につくのです。

願海に入る

それから、この章の終りのほうに「自然じねんのことはりにあひかなはば」とあります。この自然のことわりとは、自然

法爾なのです。親鸞聖人が、自然、自然といわれるときは、必ず自然の根本に本願が据えられています。私たちのいわゆる自然じねんとは、そこが違うのです。仮にこれを自然とよんでも、それは本願を信じ念佛もうすと、もう本願のお力、本願の働き、念佛の働きによって、佛恩を自然にさとらせていただけです。それで自然に師の尊さも必ず感じられてくるのです。

ゆえに、天然現象の自然とそこは少し違うのです。あくまでもそこには佛の本願、すなわち佛の大慈悲心があります。そのみ佛の大きな智慧が、いわゆる願となつていてのです。そこで、佛の無限の大智慧と、無限の大慈悲心との融合したものが、願海といわれるものです。私たちは、その願の海へ飛び込めばいいのだということを三願転入で詳しく教えています。もう理屈ではないのです。弘誓の願海へ帰入せりというのが、三願転入の一番終わりです。

親鸞聖人は、若いとき『観無量寿経』に説いてある定善散善をお努めになりました。そればかりではなく、大蔵経に教えてあるいろいろな修行の道を励まれたのです。学問も深く深く勉強をなさいます。この修行はやはり必要なコースだったのです。なぜかという、親鸞聖人は二十年間、

その道を励まれました。だが、悟りはついに開けませんでした。阿弥陀佛を如実に目の前に拝むことができなかったのです。親鸞聖人にとっては非常に悲しいことであつたのでしょう。そこで万策尽き、聖徳太子のお建てになつた観音さまの祀つてある京都の街のなかの六角堂で、百日の願をおかけになりました。九十五日目に、観音さまのお姿が現れたもうて、それは本願を信じ念佛もうすことだといふ夢のお告げがありました。親鸞聖人は非常な感動をして、これは法然上人の教えと同じであると、もう比叡山へ帰らないで、そのまま法然上人の吉水の道場へお入りになりました。これが親鸞聖人の大転換なんです。

そこで親鸞聖人は、ただ念佛一つと、南無阿弥陀佛、南無阿弥陀佛と、必死になつてお称えになられたのでしよう。しかし、お気づきになつて、これはやはり自力だ、何万遍数えたくて自力ではないか。そうではなく、本願を信じ念佛もうさばと教えてある。だが、何回称えよとは書いてない。そして、自力は本願を疑つてゐることではないかと、おのずから気づかせていただいたのです。これは、本願力がしからしめてくださったのです。それで何も理屈なし、弘誓の願海へ転入せりと、本願の海へズボッと飛び込みな

さいました。これが三願転入の結論です。非常な感激で、ありがたい、ありがたいと結んでおいでになります。

その弘誓の御誓ひ、弥陀の四十八願のぎりぎりのところは、第十八願ですが、本願を信じ念佛もうせ、必ず悟りは開けるよという御誓ひ、弘誓とは一切衆生を救わずにはおかないという本願、それを信じて、ただ念佛を称える、これが願海に飛び込んだことです。願海へ入ると、みんな一味になる。声聞だ、縁覚だ、他力だ、自力だ、そんなことは一切なくなつて、全部等しく救われると説いているのです。それが『教行信証』にも出ています。

願海にわれわれが飛び込むというのは、仰せを蒙つて南無阿弥陀佛と称えることなのです。すると念佛のお働きによつて、自然に悟りが開けてまいります。その悟りは、釈尊と同じようなところに一遍にはいかないが、さまざまな悟りがおのずと開けてまいります。そしてついに涅槃の都へと導かれていく。それは臨終一念の夕べです。それまでは迷つていくのです。しかし幾ら迷つても、信心の道へ入ると、迷いながらも、最後は涅槃の里へ行くのです。それだけはしっかり信じています。その証拠には、お念佛を称えるのです。(協和発酵工業株式会社元社長・在家佛教協会前理事長)